

沖縄経済同友会

「ラオス・カンボジア視察」報告書

平成27年1月

主催：国際委員会

共催：観光委員会

目 次

1. ラオス・カンボジア視察の目的	P 2
2. 視察団名簿	P 3
3. 視察日程表	P 4
4. ラオス・カンボジアの社会・経済	P 6
5. 視察の総括 国際委員会委員長（視察委員長） 稲嶺有晃	P 8
6. 視察先別の報告	
【ラオス】	
(1) セタティラート病院 豊田 良二（㈱琉球銀行 リスク統括部長）	P 2 2
(2) 在ラオス日本国大使館 比嘉 正彦（沖縄経済同友会 事務局長）	P 2 6
(3) ビエンチャン日本人商工会議所との昼食懇親会 比嘉 正彦（沖縄経済同友会 事務局長）	P 2 9
(4) アジア・大洋州三井物産㈱ビエンチャン事務所によるブリーフィング 比嘉 正彦（沖縄経済同友会 事務局長）	P 3 0
【カンボジア】	
(5) プノンペン日本人商工会との夕食懇親会 又吉 章仁（沖縄経済同友会 事務局研究員）	P 3 3
(6) 三菱商事プノンペン駐在事務所によるブリーフィング JICAカンボジア事務所によるブリーフィング 又吉 章仁（沖縄経済同友会 事務局研究員）	P 3 4
(7) イオンカンボジアによるブリーフィング、イオンモールプノンペン視察 出村 郁雄（㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	P 4 0
(8) プノンペン経済特区 又吉 章仁（沖縄経済同友会 事務局研究員）	P 4 7

1. 視察の目的

平成 23 年 9 月に沖縄経済同友会が県知事に提出した『新たな沖縄振興計画（産業振興）に対する提言書』ではアジアへのビジネス展開を提言しており、その可能性の調査・研究は当同友会の重要活動テーマとして位置付けられている。上記を受け、国際委員会では、平成 24 年ベトナム視察を皮切りにこれまで 7 か国を訪問し、アジアを中心に海外展開を進めている企業との意見交換会や海外事情に詳しい専門講師を招き勉強会を開催してきた。

今回は、インドシナ半島で唯一の内陸国「ラオス」と内戦の混乱を経てこれからの目覚ましい経済成長が期待されている「カンボジア」を視察することとした。

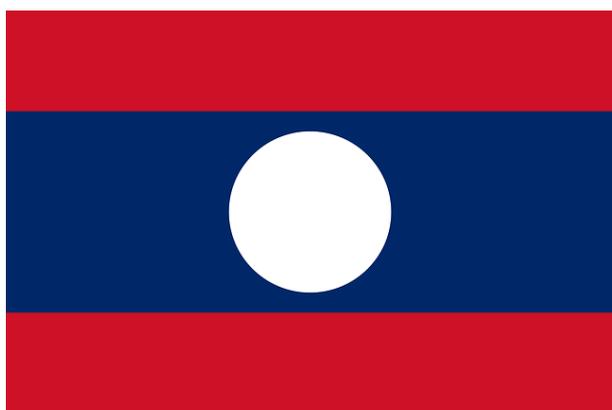
本視察は、国際委員会（主催）と観光委員会（共催）の 2 つの委員会で実施した。

ラオスでは、在ラオス日本国大使館、平成 4 年の J I C A 事業を機に琉球大学医学部が継続して口腔医療支援を行っているセタティラート病院、三井物産ビエンチャン事務所長宅を訪問しブリーフィング及び情報交換をさせていただいた。またビエンチャン日本人商工会議所の皆様と昼食を挟んで懇親を深めた。

カンボジアでは、三菱商事プノンペン事務所、J I C A カンボジア事務所、イオンカンボジア社の皆様にブリーフィングをしていただいた後、7 月にオープンしたイオンモールを視察した。また、カンボジア日本人商工会役員の皆様と懇親会を開催した。

更に、世界自然遺産登録により世界各地から年間 400 万人程の観光客を受け入れているアンコール遺跡群の視察も実施した。

視察に際し、現地視察先との調整等でご協力いただいた外務省沖縄事務所、三井物産(株)三菱商事(株)、イオン琉球(株)の皆様、ラオス人民民主共和国名誉理事岩政輝男様、事前勉強会の開催でお世話になった独立行政法人中小企業基盤整備機構、J I C A 沖縄の皆様がこの場を借りて深く御礼申し上げます。



【ラオス国旗】



【カンボジア国旗】

2. 視察団名簿

(敬称略)

氏名	当会役職	会社名・役職
玉城 義昭	代表幹事	(株)沖縄銀行 代表取締役頭取 (視察団長)
稲嶺 有晃	常任幹事	東亜運輸(株) 代表取締役社長 (視察委員長)
新垣 浩一	会員	(株)りゅうぎんディーシー 代表取締役社長
池宮 力	会員	沖縄電力(株) 取締役副社長
出村 郁雄	常任幹事	(株)おきぎん経済研究所 代表取締役社長
木村 博	常任幹事	三井物産(株)那覇支店 支店長
喜屋武 盛賢	会員	沖縄総合警備保障(株) 代表取締役社長
小橋川 朝和	会員	(株)おきぎんリース 代表取締役社長
花城 忠司	会員	(株)おきぎんジェーシービー 代表取締役社長
豊田 良二	会員企業	(株)琉球銀行 リスク統括部長
比嘉 正彦	事務局長	沖縄経済同友会事務局
又吉 章仁	事務局研究員	沖縄経済同友会事務局
神谷 和幸	【添乗員】	(株)JTB沖縄 営業担当課長



【那覇空港 国際線内にて出発式】

3. 視察日程表《平成26年12月3日（水）～12月9日（火）》

	日付	時間	行程	宿泊地
一 日 目	12月3日 (水)	11:55 13:55 20:30 21:30	那覇空港出発 台北（桃園空港）出発 ※時差▲1時間 バンコク（スワンブーム国際空港）出発※時差▲2時間 ビエンチャン・ワット国際空港到着	（ラオス・ ビエンチャン） ラオプラザ ホテル
二 日 目	12月4日 (木)	9:30 10:30 12:00 14:00	セタティラート病院 在ラオス日本国大使館 ビエンチャン日本人商工会議所との昼食懇親会 アジア・大洋州三井物産(株)ビエンチャン事務所	〃
三 日 目	12月5日 (金)	10:45 13:00 14:10 16:00	ビエンチャン・ワット国際空港出発 パークセー空港出発 シェムリアップ国際空港到着 「東洋のモナリザ」ハンタイ・スレイ遺跡	（カンボジア・ シェムリアップ） プリンストウ アンコール
四 日 目	12月6日 (土)	午前 午後 17:00 19:30	世界文化遺産 アンコール・ワット 世界文化遺産 アンコール・トム プレ・ループ遺跡最上部からの夕日観賞 伝統芸能「アプサラダンス」観賞	〃
五 日 目	12月7日 (日)	午前 11:20 12:05 午後 19:00	東南アジア最大の湖「トンレサップ湖」クルーズ 船上から水上家屋・商店・小学校等を見学 シェムリアップ国際空港出発 プノンペン国際空港到着 プノンペン市内視察 キング・フィールド、トゥールスレン博物館、国立博物館 カンボジア日本人商工会との夕食懇親会	（カンボジア・ プノンペン） プノンペンホテル
六 日 目	12月8日 (月)	午前 14:00 16:00	カンボジアに関するプレゼンテーション 三菱商事(株)プノンペン駐在所 JICAカンボジア事務所 イオンカンボジア イオンモールプノンペン視察 プノンペン経済特区視察	〃
七 日 目	12月9日 (火)	6:15 11:10 17:25 19:50	プノンペン国際空港出発 バンコク（スワンブーム国際空港）出発※時差▲2時間 台北（桃園空港）出発 ※時差▲1時間 那覇空港到着	—

【東南アジア及び視察都市地図】



4. ラオス・カンボジアの社会・経済

【ラオス】

(1) 社会

【出所：地球の歩き方（ダイヤモンド社）、在ラオス日本国大使館資料】

正式名称	ラオス人民民主共和国
面積	約 24 万km ² （本州とほぼ同じ大きさ） ※国土の 80%が高地
気候	雨季（5 月～10 月） 乾季（11 月～4 月） 暑期（4 月～5 月）
人口	約 650 万人（埼玉県とほぼ同じ）
首都	ビエンチャン
公用語	ラオス語 ※多民族国家であり各民族は独自の言語を使用している
民族	ラオ族（約 55%）、他 68 の少数民族で構成（49 民族とも言われている）
宗教	仏教（約 75%）
時差	日本との時差：▲2 時間
通貨 レート 物価	キープ（Kip） 10,000 キープ≒約 130 円（2014/4/1 現在） 物価水準目安 ⇒ ビアアオ 640ml（最も代表的なビール） /10,000 キープ 紙幣のみ流通（8 種類）：500、1,000、2,000、5,000、10,000、20,000、50,000、100,000
資源 産業	水力資源（水力発電）、鉱物資源（銅、銀、金、ボーキサイト、石炭） 農業（コーヒー、米（もち米）、野菜）、林業（炭）、繊維軽工業
社会 経済 情勢	1975 年 ラオス人民民主共和国樹立（社会主義政権） 1986 年 改革開放、市場経済へ舵取り 1997 年 ASEAN 加盟 ※ASEAN 自由貿易協定（AFTA）で一部関税引き下げ済み 2013 年 WTO 加盟 2015 年 ASEAN 経済統合（ASEAN 経済共同体（AEC）発足）予定

(2) 周辺諸国との各種データ比較

【出所：在ラオス日本国大使館資料】

	ラオス	カンボジア	ミャンマー	タイ	ベトナム	中国
人口	650 万人	1400 万人	6300 万人	7000 万人	8800 万人	13 億人
法定最低賃金（ドル/月）	78	100	53	197	113	223
工業団地借料（ドル/㎡/月）	0.03～0.06	0.1～0.11	0.21～0.5	6.9～7.22	0.17	4.77～7.16
業務用電気料（ドル/Kwh/ピーク時）	0.08～0.09	0.2	0.12	0.15	0.11～0.18	0.13
業務用水道料（ドル/㎡）	0.06～0.34	0.24～0.37	0.88	0.31～0.53	0.34～0.58	0.88
コンテナ輸送費 （ドル/横浜まで）	2114～ 2309	1500	1600	1162	2000	1005
経済特区税制上の 優遇措置	10 年免税 その後税率 8 or 10% （通常 2.3%）	9 年免税 （通常 2.0%）	5 年免税 以後 5 年間 税率半分 （通常 2.0%）	5 年免税 （通常 2.3%）	ハイテク区 のみ 10% に軽減 （通常 2.5%）	

※法定最低賃金データ：ミャンマーは一般工実勢賃金。タイは日額最低賃金 20 日分を掲載

【カンボジア】

(1) 社会

【出所：地球の歩き方（ダイヤモンド社）】

正式名称	カンボジア王国（立憲君主制）
面積	約 18 万km ² （日本の約 0.5 倍）
気候	雨季（6 月～10 月）乾季（11 月～5 月）
人口	約 1,470 万人（2013 年）
首都	プノンペン ※人口：約 150 万人
公用語	クメール語
民族	クメール人（90%）、チャム族、ベトナム人等 20 以上の民族が 10%
宗教	仏教（クメール人の大半が上座部仏教）、その他イスラム教（チャム族）、カトリック等
時差	日本との時差：▲2 時間
通貨 物価	リエル(Riel) 100 リエル≒2.6 円（2013/11/25 現在） 物価水準目安 ⇒ ミネラルウォーター 500ml/500 リエル～
資源 産業	石油・天然ガス及び銅等を探鉱。商業ベースの生産は未実施。 農業（GDP の 32%）、工業（24%）、サービス業（40%）。
略史	1953 年 カンボジア王国として独立 1975 年～79 年 ポル・ポト政権 1991 年 内戦後、パリ平和協定締結 1993 年 新制カンボジア王国（自由・民主主義）誕生

(2) メコン地域諸国 運輸電力・インフラ比較【JICA カンボジア・ブリーフィング資料より】

	カンボジア	ラオス	ミャンマー	タイ	ベトナム
一人当たり GDP (\$、2012)	934	1,349	834	5,587	1,896
道路密度 Km/100km ²	21.9 (2009)	17.3 (2011)	5.6 (2011)	35.2 (2006)	48.3 (2007)
舗装率 (%)	6.3(2004)	13.7(2009)	45.7(2011)	98.5(2000)	47.6(2007)
発電設備容量 (MW, 2012)	582	2,973	3,726	30,998	26,926
上記一人当容量 (kw/人, 2012)	0.04	0.47	0.06	0.44	0.30
電気料金 (\$/kwh, 2012)	19.43	7.75	4.36	11.40	6.62

(3) 対内直接投資統計（国・地域別）

【出所：ジェトロ HP】

	1 位 (割合%)	2 位 (割合%)	3 位 (割合%)	4 位 (割合%)
2011 年度 : 5,080 百万ドル	英国 (44.0%)	中国 (23.4%)	ベトナム (12.4%)	香港 (6.5%)
2012 年度 : 1,371 百万ドル	韓国 (20.5%)	中国 (19.2%)	日本 (15.5%)	タイ (8.8%)

※認可ベース。

5. 視察の総括 国際委員会委員長（視察委員長） 稲嶺有晃

飛び込め！ Dive ASEAN！ ～ラオス・カンボジア経済事情視察に参加して～

（1）はじめに

2014年12月3日(水)～12月9日(火)まで、国際委員会主催、観光委員会共催で、ラオス・カンボジアを訪問した。

国際委員会では、今年度の活動方針において、「アジアをビジネスの交流拠点として最大限に生かすためにアジアを中心に海外展開を進めている企業との意見交換、アジアへのビジネス展開を調査するため海外視察を行うこと」を掲げた。その訪問先として今年度は、ラオスとカンボジアを視察先とした。

アジア経済事情視察は、2011年2月のベトナムを皮切りに、インドネシア、シンガポール・マカオ・香港、昨年12月のタイ・ミャンマー、今年10月の韓国済州島に続いた。今回は、東南アジアの経済事情視察の第6弾となる。これで9カ国12地域を訪問したことになる。

ラオスは、インドシナ半島唯一の内陸国。ASEAN列車の最後尾といわれ、地域内で最も近代化の遅れている国の一つである。沖縄平和賞を受賞した琉球大学医学部歯科口腔外科の皆さんのラオスにおける口唇口蓋裂患者に対する無料巡回診療（手術）をご存知の方も多と思う。近年の経済成長は著しく、ベトナムやタイを結ぶ道路や橋梁の整備が進み「タイ+1」として、日本企業の注目度も高い。

一方、カンボジアは、世界遺産の中で最も行きたいと言われるアンコールワットをはじめ、多くの旅行者が訪れる国である。1970～80年代のポルポト政権及びその後の戦乱と政治的混乱で受けた傷もようやく癒え、政治的にも安定し、ミャンマーと並んでアセアンの投資フロンティアとして注目を浴びている。

視察団は、玉城義昭代表幹事（沖縄銀行頭取）を団長に、出村郁雄観光委員長（おきぎん経済研究所社長）、木村博環境・農業・エネルギー委員会委員長（三井物産那覇支店長）をはじめ13名。ラオス（ビエンチャン）、カンボジア（シェムリアップ、プノンペン）を訪問し、現地の日本大使館、日本人商工会、日系企業、JICAなどとの意見交換、病院、ショッピングモール、観光施設、経済特区などを視察した。それぞれの視察先の詳細は団員の報告によるとして、私は、全体的な印象などを報告させていただく。

（2）事前学習会

出発前に両国の概要や経済情勢についての事前学習会を開催した。まず、10月27日に、JICA 沖縄国際センター（粕谷亮所長）の協力を得て、浦添の同センターにて、沖縄とラオスをインターネットでつなぎライブで JICA ラオス事務所次長讓尾進氏から「ラオス国概況及び JICA の取り組み」についてご講話をいただいた。アセアン諸国の中でベトナムと同じく市場経済を進める安定した社会主義国家として、鉱物や電力などの豊富な資源の輸出増が期待されている。また、周辺諸国の賃金上昇や自然災害、反日暴動などのリスクヘッジ

のため、チャイナ+1、タイ+1として日系企業の進出が顕著とのこと。急な成長を遂げていること。また、JICA 事業としては、低開発途上国からの脱却支援のトップドナーとして、経済・社会インフラの整備や農業、教育、保健医療サービスなど幅広い分野で支援を行っているなどラオス側から高い評価を受けているとのこと。その後、琉球大学工学部に留学しているウォンソンサイ・ウィラユツ氏より日本や沖縄の印象など体験発表をしていただいた。



【ラオス事前学習会】



【留学生による体験発表】

第2回は、カンボジアである。11月21日、中小企業基盤整備（以下「中小機構」）の協力を得て、沖縄総合事務局那覇第2合同庁舎で、カンボジア在住の中小機構・国際化支援アドバイザー小市琢磨氏から「カンボジアの経済、貿易、投資環境と進出日系企業」について、ご講話をいただいた。カンボジアの経済概況の説明のあと、中小企業進出のチャンスについて、熱く語っていただいた。長引いた内戦で国内産業が育たなかった同国では、外資規制が緩く、外国資本を積極的に誘致している。特に法人設立、個人事業開始のハードルが低いため、低コストでトライアル進出ができるとのこと。若く、手先が器用な人材が豊富なカンボジア進出を期待しているとのことであった。



【カンボジア事前学習会】



【講師の小市琢磨さま】

(3) ラオス

12月3日、いよいよ出発である。出発前に那覇空港国際線特別待合室で結団式を開催し

た。玉城代表幹事から「飛び込め！アジアシリーズ第6弾」。アセアン最後のフロンティア「ラオス」、行って見たい世界遺産第一位のアンコールワットのある「カンボジア」。沖縄21世紀ビジョンに示された万国津梁の実践・きっかけになる視察としたいと挨拶があり、視察がスタートした。

ラオス・ビエンチャン2日、カンボジア・シェリムアップ2日、プノンペン2日の6泊7日の視察研修である。台北・桃園国際空港からバンコク・スワンナブーム国際空港へ。約3時間の乗り継ぎ時間を空港内のタイ料理屋でトムヤンクン麺とタイビールを飲みながら、今後の日程等について懇談した。ラオ航空に乗り換える。青を基調とした機内は落ち着きがある。キャビンアテンダントの太めの眉の化粧は、ミャンマーの寝釈迦像のようだ。国際線の乗り換え3回。短い時間での機内食が続くと少々食傷気味である。現地時間午後9時30分ビエンチャン・ワッタイ国際空港へ到着。シンプルな空港である。夜遅い到着のせいかわざわざ混んでいない。専用車に乗り換え、11時前に宿舎のラオプラザホテルに到着した。



【ビエンチャンへの機内にて】



【現地ガイドのサノンさん】

[セタティラート病院]

翌4日9時30分セタティラート病院を視察。入口にはラオスの象徴である象と沖縄から贈られた対のシーサーが。玄関で看護師長らから花束の贈呈を受けた。セタティラート病院は琉球大学医学部がさまざまな医療支援を行っている。特に口唇口蓋裂患者に対する無料巡回診療（手術）は評価が高く、その功績に対し第3回沖縄平和賞が授与された。大会議室には大勢の医師、看護師が私たちを歓迎してくれた。中には琉球大学に留学していた医師2名もいる。院長のカンペ・ポングサバト博士から、病院の概要のラオスの医療事情等の説明を受けた。その後質疑応答に入り、ラオスの医療保険制度などについて質問があった。

[ラオス日本大使館]

その後、ラオス日本大使館を訪問。在外公館の中に入るのは初めての経験である。入口から厳重な警戒。カメラも中に持ち込めない。大使館では、岸野博之特命全権大使、望月俊晴2等書記官、二元裕子広報文化班長から、ラオスの人民民主共和国の経済・投資環境

の動向について、概要説明を受けた。質疑応答で、周囲を大国に囲まれた小国がなぜ生き延びられたのかとの質問に対し、「緩衝地帯だからです」との答えは印象に残った。近隣諸国を常時気遣い、絶妙なバランス外交で国の存続を図るラオス。ラオスを陸の狭間と表現するなら、沖縄は海の狭間といえよう。沖縄の外交戦略の見本がここにあるかもしれないと感じた。



【ビエンチャン郊外の様子】



【在ラオス日本国大使館外観】

[ビエンチャン日本人商工会議所]

大使館を後にし、ラオス料理の TAMBAK RAO RESTAURANT で、鈴木亮太郎公使、ビエンチャン日本人商工会議所(佐藤照久会頭・アジア大洋州住友商事会社ビエンチャン事務所長)、JICA ビエンチャン事務所の皆さんと昼食を兼ねた情報交換。JICAの木下さんは元 JICA 沖縄国際センターの所長。ラオスが気に入って定年退職後、移住してきたとのこと。沖縄とラオスは、気候も気心も似ているという。ラオスミドリ安全靴の遠藤隆工場長の話は深い。土地が豊かで農業をしていけば食べることに困ることはないラオスで、人を雇い、教えることのむずかしさ。両親も働いたことがないので初めて労働の対価として報酬を得る経験をした若者。2010 年赴任した当初の離職率は15%前後だったとのこと。そのような若者に労働とは何かから始まって、挨拶や掃除、時間を守ることなど生活全般にわたって教育が必要だったという。時間も掃除も雑だが大らかで寛容。浪費家だけどお土産でも弁当でも皆で分けて独占しない。仕事の意欲は欠けるが、人を押しつけたり悪く言うことをしない・・・など、うちなーんちゅのことを言われているようであった。従業員と積極的に話をして、ラオスの習慣や考え方を学び、教え方を変え、今では目標数値を達成できる工場に変化し、従業員も成長したとのことであった。

[アジア大洋州三井物産ビエンチャン事務所長社宅]

その後、吉田利司三井物産ビエンチャン事務所長の社宅を訪ねた。数年前に開催されたアセアン首脳会議で使用された高級住宅街の一角にある住宅である。道の向こうはメコン川。対岸はタイである。ラオスの経済概況を JETRO の英語版資料を元に説明いただいた。

[オールドマーケット]

ショッピングモールとオールドマーケットを視察。ショッピングモールは階ごとに取り

扱う商品が異なる。金や宝石を扱うお店が並ぶ2階は、金色が眩しいほどだった。隣の古くからあるオールドマーケットは、衣類や電気製品、日用雑貨が並ぶ。那覇の公設市場の雰囲気だった。ラオスの伝統的女性用民族衣装シン（腰巻スカート）や絹製のスカーフを取り扱う店が多い。かりゆしウェアにも見えそうな長袖のシャツがあったので、つい買ってしまった。お土産は、絹製のスカーフだ。

ラオスは仏教国。ショッピング後、ラオス最大の仏塔金色のタートルアンへ。観光客もそれほどいない。お土産品を売るおばさんもそれほどしつこくない。寺院を背に記念撮影をして、夕食会場に向かった。



【ショッピングモールの貴金属売場】



【オールドマーケット】

[ラオス料理]

夕食は、吉田三井物産ビエンチャン事務所長とともに KUALAO RESTAURANT でラオス料理をいただく。大きな丸盆に月桃のような葉を敷き、その上に10種類以上のラオス料理を小皿に盛ったPA KAO というラオス名物をいただいた。香辛料もきつなくマイルドで優しい味だ。

ホテルに戻ってインターネットに接続する。W I F I はロビーでは使用可能だが部屋では接続できなかった。ホテルの部屋でのW I F I 無料接続が当然のサービスと思っていたがそうではないようだ。これからの観光には必需品かもしれない。沖縄ではどうだろうか。



【所せましと並ぶラオス料理】

(4) カンボジア・アンコール遺跡群

【パークセーからシェムリアップへ】

5日はカンボジアシェムリアップへの移動日。ビエンチャン空港で日本への絵葉書を送った。絵ハガキは旅の思い出になる。送り先は、家族が多い。今度は孫たちに送った。いつか海外に雄飛して欲しいと思いつつ。空港の郵便局に珍しい蝶を図柄にした切手があった。スジグロカバマダラの切手だ。日本では南西諸島にも見られる東南アジアからオーストラリアに生息するマダラチョウとのこと。

ビエンチャン空港から国内線でパークセーへ。その後国際線に乗り継ぎシェムリアップへ。アンコール遺跡群のある町である。訪問するのは16年ぶりだ。空港が全く違う。大きくそして優雅だ。赤いレンガを積んだようで、アンコールワットがこんな色だったのではないかと想像させる。



【パークセー空港】



【シェムリアップ国際空港】

1998年5月、亡父一郎にシアヌーク国王からサハメトレイ勲章が追贈され、その受章式に出席した兄恵一に同行させていただいた。当時のカンボジアは、内乱の後、ソン・サム政権ができた直後。シアヌーク国王もプノンペンではなくシェムリアップの別荘で執務をとっていた。当時、空港は平屋建てで、機関銃を持った軍人が入国手続きをしていた。道は舗装されておらずでこぼこ。道の両端はごみが散乱し、川も汚れている。50年前のガープ川のような感じだった。

今回シェムリアップに降り立ち、この間のカンボジアの発展が夢のように思えた。多くの観光客で賑わっている。空港の駐車場も満杯状態だ。

到着後専用バスで「バンティアスレイ」へ向かう。フランスの美術評論家アンドレ・マルローが剥ぎとろうとしたといわれる「東洋のモナリザ」と呼ばれるレリーフに、往時の繁栄を偲んだ。



【バンティアイスレイ遺跡にて】



【東洋のモナリザと呼ばれるレリーフ】

夕食は、皇家帝国大酒店で中華料理。泡盛のもとになった酒といわれるラオ酒はあるかと聞くとないという。アンコールビールとワイン、ウィスキーを。世界で一番うまいビールがアンコールビールとのこと。外資系のビール会社の指導を受けているようだ。

夕食後ホテルにチェックイン。ホテルは PRINCE D' ANGKOR。シェリムアップの中心部にある比較的新しいホテルだ。16年前、国際的ホテルはラッフルズホテルのみだった。今は10以上のホテルがある。ところが、WIFIが繋がらない。部屋でもロビーでも繋がらない。少々困った。また、この地も韓国からの観光客が多い。日本人よりも多いかもしれない。昨年訪問したミャンマーでも感じたが、韓国の進出はすごい。韓流ブームはここでも広がっている。



【郊外の田んぼと高床式住居】



【農作業用の牛】

[アンコール遺跡群]

翌6日は世界遺産アンコール遺跡群の視察だ。世界遺産の中でいま最も人気があるところだ。シェムリアップ市街から遺跡群までの道路は、観光バスとトゥクトゥクと呼ばれる簡易タクシーでいっぱいだ。世界中から観光客が押し寄せているようだ。アンコールトムからの視察予定だったが、観光客が多すぎて入場制限が行われ、入れないという。そこで、アンコールワットからの視察となった。12世紀前半のアンコール王朝時、最大のヒンズ

一教寺院。太陽神ヴィシュヌにささげた壮大な伽藍だ。広大な池に囲まれた三つの塔は、威厳さえ感じさせる。その池を渡る長い橋の両端には、神々と阿修羅の像が。蛇の胴体をもった神々と阿修羅の彫像だ。天国と地獄をつなぐ橋なのかと思いながら渡る。ロシア語、フランス語、中国語、韓国語…英語以外の多くの外国語が飛び交う。髪の色も目の色もさまざま。まさに国際観光都市だ。寺院の中に、日本人の落書きがあった。江戸時代に渡航してきたそうだ。インドの寺院と勘違いしたらしい。大航海時代、琉球からも商人が来ていたかもしれないと往時を偲んだ。



【アンコールワットにて】



【江戸時代の日本人による落書き】



【入口に向かう橋にて。外国人で混雑】



【政府公認ガイドのレットさん（中央）】



【シュムリアップ郊外の様子】

お土産にとアンコールクッキー・マダム幸子の店に案内された。オーナーは小島幸子さん。2008年日経ウーマンオブザイヤーにも選ばれた女性社会企業家として有名だ。カンボジアの原料を使い、カンボジア人の手によって本当のカンボジアの製品を作り、カンボジアを訪れる観光客に品質のいいカンボジア土産を提供している。日本人の観光客でいっぱい。現地のカンボジア人の接客も素晴らしい。日本語も上手だった。

昼食はTHE SQUARE24。テンポラリーなカンボジア料理の店。壁もなくオープンテラスで風が気持ちいい。ラオスよりさらに優しく美味だった。このレストランの食事が今回の旅行では一番だった。



【マダム幸子の店内。日本人観光客で盛況】



【現地の方が日本語で接客】

午後の視察は3時からとのこと。南国だけあってお昼休みの時間が長い。

午後の休憩の後、アンコールトムを視察。12世紀後半のアンコール期最大の都。バイヨンはその中心をなす仏教寺院。クメールの微笑と呼ばれる観音菩薩の四面像が無数に並ぶ光景は圧巻である。これほど無数の四面像をどう作ったのか？命令と強制でこれほどの芸術群を作れるのだろうか？国民の信頼を集めた素晴らしい王様だったのだろう。

アンコールトムを後にし、お土産品店などに立ち寄った後、プレループからシュムリアップの森に沈む夕日を見る。空の青が赤くなり暗くなっていく様子は幻想的だ。



【アンコールトムにて】



【夕日に映えるプレループ遺跡】

夕食は、カンボジアの伝統芸能「アプサラダンス」を観賞しながらフランス料理をいただいた。アンコールワットの壁画には、天女アプサラの物語が刻まれる。霊薬アマリタを手に入れるため、神々とアスラが大海をかき混ぜ、そこに生まれたのが天女アプサラ。そのアプサラの物語を舞踊にしたのだそうだ。ポルポト派の粛清で消えかかったアプサラダンスを復活させた文化の力。2003年に世界無形文化遺産に選ばれている。



【アプサラダンスを観賞】



[トンレサップ湖]

6日はプノンペンへの移動日。朝早く東南アジア最大の淡水湖トンレサップ湖へ。乾季と雨季では面積が倍以上違うという。周辺に8万人が暮らすという伝統的な水上生活の湖だ。湖に学校、病院、教会まである。船に乗り換えて周遊する。船に乗ると船頭の弟らしい小さな子が肩をもむ。チップを要求している。小さな小舟が近づいて少年が飛び乗る。コーラやジュースを販売している。次に来たのは蛇を首に巻いた少女だ。びっくりして後ずさりすると今にも船に乗り込もうとする。チップをあげてさよならした。ワニや鯰の養殖場をしているボートを見学した。生簀にワニと鯰を飼っている。ワニ皮はこの地域の特産品らしい。携帯通信用の大きなアンテナが立っている。電気が来ないので、車のバッテリーで、電気を使っているようだ。バッテリー屋は大繁盛している。ここにも韓国の進出があった。韓国国旗を掲げた家々や韓国料理のレストランまである。



【湖上の学校】



【湖上のバッテリー屋】

トンレサップ湖を後に、空港へ。カンボジア航空でプノンペンへ向かった。プノンペン空港は南国の開放的な空港だ。

(5) カンボジア・プノンペン

【トゥールスレン博物館】

プノンペンのガイドはとても特徴的だった。暗い。それでいてブラックユーモアに満ちている。聞くと日本人の坊さんに日本語を習ったらしい。まだ日本に行ったことがないそうだが、よく勉強している。空港前の中華レストランで昼食を取り、市内視察へ。



【政府公認ガイドのペイペットさん】



【プノンペン郊外の様子】

はじめに、ポルポト派による虐殺の現場キリングフィールドへ。骸骨や虐殺の道具を展示した慰霊塔がある。ここで犠牲者の冥福を祈り花をささげた。大きなガジュマルのそばに、直径5メートルぐらいの穴がいくつもある。ここが虐殺の現場だという。次にトゥールスレン博物館へ。ここは市内の真ん中にある元高校だった収容所の跡だ。拷問の様子や犠牲者の写真が多く展示されている。奇跡的に生き残った老人が本を売っているが、どうしても買う気になれなかった。

「サンクチュアリー」(史村翔原作、池上亮一作画、ビッグコミックスペリオール) という漫画を知っているだろうか。カンボジアの戦乱から奇跡的に帰国した2人の日本の少年

が、腐敗した日本の政治を表と裏の世界から変革していくストーリーだ。私はこの漫画でカンボジアの虐殺のむごさを初めて知った。無垢の人間が非道なことを行ってしまう怖さを知った。

最後に、芸術村の近くにある国立博物館へ。カンボジア各地から出土したクメール遺跡の石像や美術品が収集・展示されている。時間がなくわずか30分の見学。次回はじっくり見たいものだ。



【トゥールスレン博物館】



【キリングフィールドの慰霊塔】



【国立博物館にて】



【インド神話の怪鳥ガルダ】

[カンボジア日本人商工会]

夕食は、カンボジア日本人商工会（中野広志会長。三井物産プノンペン事務所長）の皆さん5名との情報交換を兼ねた懇親会。場所は、プノンペンイオンモール内のフレンチレストラン FINCH。本店は北海道札幌にあるとのこと。ここが、カンボジアとは思えないほど、本格的な素晴らしいレストランだった。中野会長は、カンボジアに来て5年。前任地は韓国とのこと、韓国語もペラペラだ。韓国人はカンボジアの日本人のことを、「満州軍のいない韓国だ」と言っているそうだ。純粋に経済援助に徹している姿を言っているらしい。なるほどと感心した。

ホテルに戻って、プノンペン視察の裏方をさせていただいた三井物産プノンペン副所長の菊池さんと懇談した。彼が木村三井物産沖縄支店長と密な連絡をさせていただいたおかげで、今回の視察も順調に進められたのだ。改めて、感謝申し上げたい。

【カンボジア経済概況】

12月8日、いよいよ今日が最終日だ。奇しくも今日は、私が勤める東亜運輸の創立記念日だ。創立44周年をカンボジアで迎えられるとは。不思議な縁を感じる。

午前中は、ソフィテルホテルで、カンボジアの概要説明だ。はじめに三菱商事プノンペン駐在事務所有井淳所長から、カンボジアの概要について説明を受けた。奥様と息子さん達4人で赴任とのこと。高校1年になる息子さんの進学や学校で相当ご苦労されたそうだが、息子さんが頑張っけて付いてきてくれたことを感謝し、誇りに思うと語ってくれた。仕事で行く本人よりも、ついてくる家族の方がもっと大変なんだなと痛感した。

また、JICAカンボジア事務所の伊藤隆司次長から、カンボジアにおけるインフラ整備状況について、説明を受けた。外資に対しオープンなのはいいが、自分たちで解決しようという意欲にかけるといふ手厳しい意見であった。国のエネルギーの根幹をなす発電事業も中国任せで、場当たりのPPP（民間による開発）を何とかしてほしいとのことであった。カンボジアを中心に、タイ、ミャンマー、ベトナム、中国を結ぶ東西・南部経済大動脈構想実現へ日本政府・JICAの並々ならぬ決意を感じた。

最後にイオンカンボジア社長鷲澤忍氏の、イオンモールオープンまでの市場調査から投資決定、建設、採用、品揃えの手法などをお話しいただいた。イオンモールは単なるショッピングモールではなく、プノンペンの六本木ヒルズだと自信を持っておっしゃっていたのが印象的だった。

ホテル向かいの中華料理店福祿寿で昼食を取り、イオンモールを見学した。月曜日なのに人でいっぱい。とにかく広い。自動車1400台、バイク1600台収容の駐車場は広大だ。話の通り単なるショッピングモールではない。プノンペンのシンボルといえる最先端のテナントミックスを実現したモールだ。食品、衣料、雑貨などの定番の外に、フードコート、レストラン、シネマコンプレックス、ボウリング場、スケートリンク、テレビ局、各種学校まである。まさに中間層が拡大し、成長し続けるカンボジアの未来を象徴するモールだった。

【プノンペン経済特区】

イオンを後にし、車で1時間弱のプノンペン経済特区を視察した。アシスタントマネージャーのハック・セレイ氏から概要説明を受けた。プノンペン経済特区（以下[PPSEZ]）カンボジア華僑と日本の合弁会社。2008年より分譲開始。15か国77社が入居し、日系は42社に上る。小型モーターのミネビアや自動車ワイヤーの住商、スポーツシューズのタイカなどが入居している。PPSEZでは従業員の募集のお手伝いやマネジメント労務サポート、宿舎、食堂の運営まで入居企業の様々な問題解決に注力しているとのことであった。

時間がなく個別企業の訪問は出来なかったが、ここには、以前から知っている富山の精米機メーカータイワ精機が入居している。カンボジアで生産されるコメは、精米技術が不備のため直接隣国に持ち出されそれぞれの国で加工され販売されている。自国で生産、精米、輸出にこぎつけられないか？その支援をしているのがタイワ精機だ。JICAの支援を受

け日本の中小企業の技術力が合わさって、新たな開発が開花しようとしている。これからの中小企業な海外展開のあり方を示す社会貢献の具体例だ。

視察後、特区内の日本食レストラン東京で夕食を取り、ホテルへ戻った。

【帰国】

12月9日、帰国の日である。朝2時半にモーニングコール、3時半にホテルを出発だ。当初プノンペンから台北経由で帰国する予定が、突然プノンペン～台北間がキャンセルとなったため、プノンペン～バンコク～台北～那覇となったためだ。この7日間で合計9回飛行機に乗ったことになる。ところがあまりに早く空港に着きすぎたため、空港が開いていない。航空会社のカウンターも5時からしか開かないという。結局1時間空港の外とロビーで待っていた。バンコクで約3時間乗り継ぎ待ちを経て、台北経由で那覇到着。全員、体調を崩すこともなく、健康・無事故で帰国することができた。これも添乗員の神谷さんをはじめ事務局の比嘉事務局長、又吉君のサポートのおかげだ。ありがとう。

6. 終わりに

今回は、アセアン最後の宝石、アセアン投資フロンティアといわれるラオスとカンボジアを訪問した。ASEAN 諸国は2015年までにASEAN 経済共同体を形成し、物品、サービス、投資、熟練労働者の自由な移動と資本のより自由な移動をめざしている。人口6億余りの巨大な市場が誕生する。これでメコン流域5か国をすべて訪問したことになる。

カンボジアをへそにして周辺のタイ、ベトナム、ラオス、ミャンマーが、橋梁、道路網の整備により東西南北が結ばれる。労働力の流動化、企業の分散投資がさらに進むと思われる。この5か国の一体感がさらに増すだろう。

ラオスは、巨大国の狭間にあり、市場経済を進める社会主義国家として、したたかに国際社会で生き残っている。沖縄と似た民族性を感じたのは私だけではないだろう。陸の緩衝地帯ラオスと海のキーストーン沖縄が連携して、多様性と寛容性を持った新たな国際連携が出来ないものかと思った。

カンボジアは、大きく変化している。大虐殺の記憶が薄れてきたとはいえ、社会の根っこにその悪夢がまだ残っているような気がした。すべてを外国にオープンにして自国の投資環境をゆだねる姿勢は今後どのような国づくりをしようというのかわからなくなったというのが素直な感想である。中小企業にとっては外資規制の緩いカンボジアは海外展開をトライする上では、チャンスだともいえるが、一方で、アンコールクッキーやタイワ精機のように、国づくりに貢献できるような海外展開が、今最も必要とされているのではないかと感じた。

また、思いやりの心や気候風土などアセアンと類似性の多い沖縄が、日本とアセアン諸国の成長と発展の要になることをさらに確信した視察であった。